

福留急傾斜地崩壊対策事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

七尾市

三室福浦C遺跡・三室福浦古墳群

2011

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

三室福浦C遺跡・三室福浦古墳群

2011

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は三室福浦C遺跡・三室福浦古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は七尾市三室町福浦地内である。
- 3 調査原因は福留急傾斜地崩壊対策事業であり、同事業を所管する石川県土木部砂防課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は御石川埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成19(2007)年度から平成22(2010)年度に実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は、石川県土木部砂防課が負担した。
- 6 現地調査は平成19年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者(当時)は下記のとおりである。
 - (1)三室福浦C遺跡他1遺跡(第1次調査)
 - 期 間 平成19年9月19日～同年9月28日
 - 面 積 30㎡(三室福浦C遺跡・三室福浦1号墳)
 - 担当課 調査部調査第2課
 - 担当者 安中哲徳(主任主事)、山下陽介(嘱託)
 - (2)三室福浦古墳群(第2次調査)
 - 期 間 平成19年10月22日～同年12月21日
 - 面 積 130㎡(三室福浦C遺跡・三室福浦2号墳)
 - 担当課 調査部調査第2課
 - 担当者 安中哲徳(主任主事)、山下陽介(嘱託)
- 7 出土品整理は平成22年度に実施し、調査部関係調査グループが担当した。
- 8 報告書の作成及び刊行は平成22年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
執筆及び編集は安中哲徳(調査部関係調査グループ係主査)が行い、米澤義光(調査部特定事業調査グループグループリーダー)、中屋克彦(調査部関係調査グループ専門員)、和田龍介(石川県教育委員会文化財課埋蔵文化財グループ係主査)が補佐した。
- 9 調査には下記の機関・個人の協力を得た。(五十音順、敬称略)
石川県土木部砂防課、北林雅康、小嶋芳孝、善端 直、田村昌宏、堂谷内正、戸調幹夫、中能登土木総合事務所、七尾市教育委員会、向井裕知
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は磁北である。
 - (2) 水平基準は海抜高であり、T. P. (東京湾平均海面標高)による。
 - (3) 遺物観察表の「番号(Na)」は遺物図版、観察表、写真図版で共通する。
 - (4) 遺物観察表の「実測番号」は遺物整理時の整理番号で、出土遺物に注記してある。
 - (5) 遺物観察表の「出土地点」は現地での取り上げ位置・番号である。
 - (6) 各遺物の法量・計測値は復元値、残存値も含み、()付とした。単位は土器cm、銅銭mm、gである。
- 12 引用文献・参考文献等は、巻末に一括して掲載している。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	3
第3章 調査の概要及び成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構と遺物	8
第4章 ま と め	16
第1節 三室福浦古墳群1号墳・2号墳について	16
第2節 三室福浦C遺跡の中世墓・近世墓について	16

写真図版

報告書抄録

引用・参考文献

挿 図 目 次

第1図 三室町の位置	3	第7図 2号墳墳丘断面図3	12
第2図 三室町周辺の遺跡	4	第8図 2号墳中世墓平・断面図	13
第3図 調査区位置図	7	第9図 2号墳断面位置図・遺物出土位置図	13
第4図 1・2号墳平面図、1号墳中世墓断面図	9	第10図 出土遺物(土器)	14
第5図 2号墳墳丘断面図1	10	第11図 出土遺物(銅銭)	15
第6図 2号墳墳丘断面図2	11		

表 目 次

第1表 三室町周辺の遺跡一覧表	5	第3表 銅銭観察表	15
第2表 土器観察表	15		

図 版 目 次

図版1 遺構1	図版5 遺構5
図版2 遺構2	図版6 遺構6
図版3 遺構3	図版7 遺構7
図版4 遺構4	図版8 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成19年3月25日、石川県輪島市の西南西沖40kmを震源とするマグニチュード6.9の大地震が能登半島一帯を襲った。平成19年度能登半島地震と称される大地震である。県内で観測史上初の震度6強を記録した本地震は能登半島各地に甚大な被害を及ぼし、4年が経過した今でもその爪痕を各地に見ることができる。同年4月、県土木部砂防課(以下、砂防課)より、急傾斜地崩壊危険区域に指定され対策事業が計画的に実施されている七尾市三室町地内の崖地において、本地震により民家裏側の崖が部分崩落を起こしたため、計画を前倒しして福留災害関連緊急急傾斜地崩壊対策事業を実施したい旨、県教育委員会文化財課(以下、文化財課)に協議があった。崩落のあった崖地の上には周知の埋蔵文化財包蔵地「三室福浦古墳群」が存在し、大規模な切土を伴う工事内容であったことから、文化財課は、古墳所在の詳細確認及び工事計画と埋蔵文化財保護の調整を図ることを目的に埋蔵文化財分布調査の実施が必要であると判断した。文化財課と砂防課、工事を実施する中能登土木総合事務所(以下、中能登土木)との間で実施日時や方法等について協議を重ね、人力による試掘調査を同年6月14日に実施した。その結果、工事計画範囲内には三室福浦古墳群として少なくとも2基(三室福浦1号墳・2号墳)の古墳が立地し、中世の集石状遺構を確認したことから、古墳群に加え、新発見の中世の埋蔵文化財「三室福浦C遺跡」として周知化された。

この分布調査の結果に基づき、文化財課と砂防課・中能登土木の3者で協議を行った結果、工事内容を大きく変更し埋蔵文化財を現状保存することは困難であること、現に部分崩落が起こり工事の実施も急がれることから、工事で埋蔵文化財が損壊する範囲を対象に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。平成19年9月6日に、文化財保護法第94条1項の規定に基づき「土木工事等のための発掘通知」が石川県知事から県教育委員会に提出され、9月6日付け教文第2368号にて事前の発掘調査が必要な旨を通知した。

第2節 調査の経過

砂防課及び中能登土木から、早期の発掘調査完了の要望を受け、まずトレンチによる予備調査を実施して作業量を把握し、本調査期間を確保することになった。そのため平成19年9月10日付けで発掘調査等委託契約が石川県知事と㈱石川県埋蔵文化財センター(以下、県埋文センター)理事長との間で締結され、9月11日付けで文化財保護法第92条第1項に基づく「発掘調査届」が県埋文センター理事長から県教育委員会に提出された。9月13日に中能登土木、文化財課、県埋文センターの3者で現地事前打ち合わせを行い、9月19日から28日まで三室福浦C遺跡他1遺跡(三室福浦古墳群)の30㎡を対象とした発掘調査(第1次調査)を県埋文センターが実施した。その結果、三室福浦C遺跡からは中世の配石墓や集石墓がみつかかり、珠洲焼や銅銭などが出土したが、調査区内に存在する集落の共同アンテナが支障となり、遺構の完掘はできなかった。また、中世墓の下層には横穴式石室のものと考えられる大型石材を確認し、古墳時代後期から終末期の須恵器や土師器が出土した(1号墳)。また、丘陵南斜面でも大型の石室石材の散布を確認した(2号墳)。

これを受けて、文化財課は砂防課に平成20年度に発掘調査の一部を先送りせざるを得ないこと及び

第2節 調査の経過

工事工程の見直し等を求め、並行して県埋文センターと文化財課の間で今後の調査の実施方法や調査期間の確保等の協議を重ねた。その結果、平成19年度の発掘調査は最優先で工事を実施する箇所にあたる2号墳を対象とすること、1号墳及び三室福浦C遺跡については、平成20年度の早い時期から調査を実施することとなった。平成19年9月26日付けで文化財保護法第92条第1項に基づく「発掘調査届」が県埋文センター理事長から県教育委員会に提出され、9月28日付けで発掘調査等委託契約が石川県知事と県埋文センター理事長との間で締結された。10月11日に中能登土木、文化財課、県埋文センターの3者で現地事前打ち合わせを行い、10月22日から12月21日まで三室福浦古墳群(三室福浦C遺跡)の130㎡を対象とした発掘調査(第2次調査)を県埋文センターが実施した。

平成20年3月末に中能登土木から地元との調整により現行工事計画を変更する旨の協議があった。その後、3者で今後の埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねた結果、次の事項について合意した。(1)対策工事は、埋蔵文化財の保護措置が完了していない三室福浦1号墳の包蔵地範囲内に工事が及ばないこととする。(2)1号墳の現状は平成20年度に発掘調査を実施することを前提として埋め戻し等を行っていないため、中能登土木が文化財課の指示の下、埋め戻しによる現状復旧を実施する。(3)砂防課が平成19年度に実施した発掘調査の出土品整理及び報告書刊行事業を県埋文センターに委託して実施する。

これを受け、平成20年11月、新たな工事計画による同地の対策工事に係り、埋蔵文化財分布調査依頼が中能登土木から文化財課へ提出され、平成21年2月に文化財課が対象となる丘陵の全域踏査を実施したところ、新たな埋蔵文化財は確認されなかった。また、1号墳の現状復旧(埋め戻し)も適切に実施されたことを踏査時に確認している。

平成22年度に県埋文センターが出土品整理及び発掘調査報告書の作成、刊行を行った。

調査体制

調査期間	第1次調査 平成19年9月19日～同年9月28日 第2次調査 平成19年10月22日～同年12月21日
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 中西 吉明)
総括	前田 憲治(専務理事)
事務	山下 淳映(事務局長)
総務	宅崎 仁芳(総務課長)
経理	熊谷 省吾(経理課長)
調査	谷内尾晋司(所長) 湯尻 修平(調査部長) 西野 秀和(調査第2課長)
担当	安中 哲徳(調査第2課主任主事) 山下 陽介(調査第2課嘱託)

整理体制

整理期間	平成22年8月27日～同年8月31日
整理主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 竹中 博康)
総括	橋本 満(専務理事)
事務	栗山 正文(事務局長)
総務	浅香 繁晴(総務課長)
整理	三浦 純夫(所長) 福島 正実(調査部長) 藤田 邦雄(国関係調査グループ グループリーダー)
担当	安中 哲徳(国関係調査グループ 係主査)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境(第1図)

三室福浦C遺跡・三室福浦古墳群は、石川県七尾市三室町地内に所在する。七尾市は能登半島の中央部東側に位置する。平成16年10月1日に、これまでの旧七尾市、鹿島郡田鶴浜町、中島町、能登島町の1市3町が合併して新生七尾市として新たに誕生した。それにより面積約318K㎡に拡大し、人口も約60,000人を擁する能登半島屈指の商工業都市である。合併により北は穴水町・西は志賀町、南は中能登町と富山県氷見市と接している。市城北側には能登島との間に天然の良港七尾湾が広がり、東側は富山湾に面している。南側には能登半島屈指の穀倉地帯の邑知地地溝帯が続き、古来より能都地方の物資集積地で、海上交通の拠点ともなり産業、経済の拠点として発達してきた。近年は崎山半島西岸沿いに火力発電所やLPG国家備蓄基地などが建設され、港湾基地としての重要性が増している。また現在富山県小矢部砺波JCTと輪島IC間の総延長約100kmの高規格幹線道路の能越自動車道の建設も進められている。既存の邑知地地溝帯の東往来と西往来以外に、国道159号線鹿島バイパスも繋がり、交通の便も向上している。



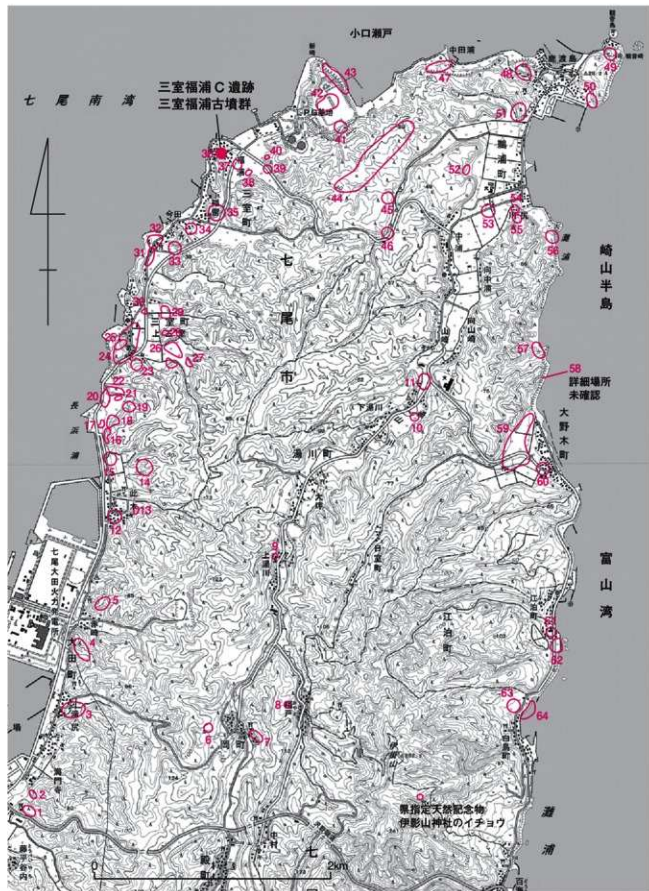
第1図 三室町の位置

三室福浦C遺跡・三室古墳群の所在する三室町地内は、石動山系から北方方向に向かって大きく突き出た崎山半島の西側先端部に位置する。崎山半島は東側が富山湾で、西側が七尾南湾に面し、崎山半島北部と幅約1.2kmの小口瀬戸を挟んで能登島と相対している。崎山半島の大部分は半島南側から標高約50~100m前後の低山・低丘陵が延びているが、半島中央部の南北には長狭な平野が崎山川沿いに広がり、崎山川は蛇行しながら富山湾へ注いでいる。半島北部の海岸沿いには低丘陵が海岸線に向かって幾筋も延び、所々に小河川による解析谷が発達し、狭小な扇状地が形成され、そこに集落が形成されている。崎山半島先端に位置する鶴浦町の観音島には、寒暖両系の植物約120種が混在して生える「観音島海浜植物群落」があり、鶴浦町法広寺には「椿林寺常緑広葉樹林」があり、共に七尾市の天然記念物に指定されている。また鶴浦町には年末に行われる「気多の鶴祭の習俗」が国指定重要無形民俗文化財に指定されている。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境(第2図、第1表)

旧七尾市内には国指定史跡も複数存在している。古代の能登国分寺跡附建物群跡、戦国時代畠山氏の居城七尾城、古墳時代前期の大型獨立柱建物群が発見された万行遺跡など多数が存在している。

以下、三室福浦C遺跡・三室福浦古墳群が存在する崎山半島西岸周辺の遺跡を概観してみたい。
旧石器・縄文時代 旧石器時代の遺跡は崎山半島では発見されていない。遺跡が確認されるのは縄文時代前期初頭からである。この時期は対岸の能登島南岸地帯にかけて遺跡数が増加する時期である。



第2図 三室町周辺の遺跡 (S=1/30,000)

第1表 三室町周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	種別	時代	出土品	No	遺跡名	種別	時代	出土品
1	海門寺古墳群	古墳	古墳		31	三室今田古墳群	古墳	古墳	
2	大田谷内遺跡	生産遺跡	平安・中世	縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、製塩土器	32	三室今田B遺跡	散布地	不詳	製塩土器
3	縄ノ尻スワンダ遺跡	散布地	平安	製塩土器	33	三室今田遺跡	散布地	不詳	土師器、須恵器
4	赤崎南古墳群	古墳	古墳		34	三室海岸遺跡	散布地	古墳	製塩土器
5	赤崎北古墳群	古墳	古墳		35	三室福留遺跡	散布地	縄文	縄文土器
6	岡3号経塚	経塚	中・近世	一字一石経	36	三室福福C遺跡・三室福福古墳群	古墳	古墳・中・近世	土師器、須恵器、珠洲焼、銅鏡
7	岡経塚群	経塚	中・近世	一字一石経、珠洲焼	37	三室福福B遺跡	集落跡	弥生時代～近世	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、製塩土器、土師、管玉、紡錘車、砥石、石臼、木製容器、ワイゴ銅口、鉄斧
8	伊野柏戸経塚	経塚	中・近世	一字一石経	38	福浦タカバ遺跡	散布地	不詳	土器
9	湯川上湯川遺跡	散布地	縄文	磨製石斧	39	三室福福遺跡	散布地	縄文	縄文土器、石鏃、骨器
10	下湯川遺跡	散布地	縄文	土器	40	福浦向面遺跡	散布地	不詳	製塩土器
11	下湯川ウラタンボ遺跡	散布地	縄文・近世	縄文土器、土師器、珠洲焼	41	三室トクサ遺跡	生産遺跡	縄文・中世	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、製塩土器、石器、木器
12	此ノ木B遺跡	散布地	不詳	製塩土器	42	三室オオタン遺跡	生産遺跡	縄文・中世	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、陶磁器、製塩土器、石器、木器、鉄製品、銭貨
13	此のホメダ遺跡	集落跡	弥生～中世	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器	43	三室新崎遺跡	散布地	古墳	土師器、須恵器、製塩土器
14	此木古墳	古墳	古墳	(所在地不詳)	44	三室福浦遺跡	散布地	縄文	土器、石鏃、石器原石
15	此ノ木A遺跡	生産遺跡	奈良・平安	製塩土器	45	福浦馬隠北遺跡	散布地	縄文・中世	土師器、珠洲焼、イルカ骨、シカ骨、馬骨、貝殻、石鏃
16	三室トリA遺跡	生産遺跡	奈良・平安	土師器、須恵器、製塩土器	46	福浦馬隠北南遺跡	散布地	縄文・中世	土師器、珠洲焼、イルカ骨、シカ骨、馬骨、貝殻、石鏃
17	三室トリB遺跡	生産遺跡	奈良・平安	土師器、須恵器、製塩土器	47	福浦中田遺跡	散布地	古墳	須恵器、製塩土器
18	三室トリC遺跡	古墳	縄文～近世	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼	48	福浦谷内山古墳	古墳	古墳	土師器、須恵器
19	三室中世墳墓群	墓	中世	珠洲焼、五輪塔、板碑	49	渡渡島B遺跡	散布地	不詳	製塩土器
20	三室まどがけ遺跡	集落跡	縄文～近世	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、土師、陶磁器、打製石斧、磨石、砥石、石鏃	50	渡渡島A遺跡	散布地	不詳	製塩土器
21	三室まどがけB遺跡	集落跡	弥生～近世	弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、陶磁器、木製品	51	渡渡島バス亭遺跡	散布地	古墳	土師器、須恵器、製塩土器
	三室まどがけ1号墳	古墳	古墳	土師器、須恵器、直刀、刀子、馬具、朱、人骨、金環、銀環	52	福浦横穴墓	古墳	古墳	須恵器変、人頭骨
22	三室まどがけ2号墳	古墳	古墳	須恵器、小刀、鉄鏃、飾り石、鉄ヤス、鉄釘針、耳環、銀製玉、琥珀玉、白玉、人骨	53	福浦B遺跡	散布地	不詳	製塩土器
	三室まどがけ3号墳	古墳	古墳	須恵器、耳環、土師器輪、人骨片	54	福浦くろさきB遺跡	散布地	古墳	土師器、製塩土器
23	三室おたんは遺跡	散布地	不詳	土師器	55	福浦くろさきA遺跡	散布地	縄文・古墳	磨製石斧、土師器
24	りきの宮遺跡	集落跡	弥生～平安	弥生土器、土師器、須恵器	56	福浦A遺跡	散布地	不詳	製塩土器
	三室りきのみや1号墳	古墳	古墳	須恵器、碧玉管玉、ガラス丸玉、土玉、ガラス小玉、貝小玉、紡錘車、刀、朱	57	福浦馬捨場遺跡	散布地	古墳～奈良	須恵器、製塩土器
	三室りきのみや2号墳	古墳	古墳	須恵器、直刀、玉類	58	福浦寺尾敷古墳	古墳	古墳	土師器、(所在地不詳)
26	三室オンド遺跡	集落跡	弥生～中世	弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、陶磁器、木製品	59	大野木タキシロ遺跡	集落跡	縄文～中世	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、輪軸陶器、青磁
27	三室堂ヶ谷内遺跡	集落跡	古墳～平安	土師器、木製品	60	大野木クボタ遺跡	散布地	古墳～奈良	土師器、須恵器、製塩土器、須恵器、珠洲焼、貝殻
28	横穴式石室用材散布地	散布地	古墳	(古墳所在地不詳)	61	江追谷内山遺跡	散布地	古墳～奈良	土師器、製塩土器
29	三室森谷内遺跡	集落跡	古墳～平安	土師器、木製品	62	江追浜田遺跡	散布地	古墳～奈良	土師器、製塩土器
30	三室上三室遺跡	集落跡	奈良・平安	土師器、須恵器	63	白鳥堂田遺跡	散布地	不詳	土師器、須恵器
					64	白鳥遺跡	散布地	古墳～奈良	土師器、須恵器、製塩土器、須恵器、珠洲焼

万行遺跡は縄文時代後期の拠点集落と考えられ土器群がまとまって出土している。三室オオタン遺跡では縄文時代晩期頃の木場遺構が検出され、三室トクサ遺跡からは丸木船が出土している。

弥生時代 弥生時代の大規模な遺跡は確認されていないが、三室福浦B遺跡や三室まどがけ遺跡、三室トリC遺跡からは弥生時代中期頃と推定される土器が発見されている。三室トリC遺跡では弥生時代後期から古墳時代初期にかけての集落跡で、土坑や溝が確認されている。また、此の木マエダ遺跡、三室オンド遺跡からは、当該期の土器が出土しているが、明瞭な遺構は検出されていない。

古墳時代 古墳時代前期になると、七尾湾沿岸各地で土器製塩が開始されたと考えられ、当初の製塩土器底部の形状は脚台を有するものである。集落遺跡としてはりきの宮遺跡で前期の竪穴建物が発見されている。また、万行遺跡では古墳時代前期の竪穴建物群、大型掘立柱建物、方形区画溝が確認され、平成15年に国指定史跡となった。三室オオタン遺跡や三室福浦B遺跡などの古墳時代終末期頃の遺跡からは、土師器や須恵器以外に土師質の移動式カマドや棒状尖底形の製塩土器が出土している。本遺跡の周辺では、七尾湾に面した丘陵上を中心に、三室りきのみや古墳群、三室今田古墳群、三室まどがけ古墳群など本古墳群と並行する古墳時代後期から終末期頃の古墳群が複数確認されている。三室まどがけ古墳群は、海岸線の丘陵上に位置し、1号墳は直径22mの円墳である。昭和32年の発掘調査で全長約9mの6世紀後半頃の横穴式石室から太刀・鉄族・馬具や、装飾品の金環・銀環・管玉・ガラス玉、須恵器壺などが出土した。2・3号墳は平成5・6年に県道拡幅に伴い調査された。2号墳は直径約12m程度の小円墳で、全長5.5m以上の7世紀前後の横穴式石室から小刀・鉄族・飾り弓・鉄ヤス・鉄釣針・銀製空玉・琥珀玉・白玉に、須恵器蓋杯・土師器椀が出土している。3号墳は直径14m程度の小円墳で、時期的には7世紀前半から中頃で、1・2号墳とは時期・石室構造が異なる。全長6mの横穴式石室から耳環・土師器椀・人骨片が出土し、前庭部からは須恵器高杯と横瓶が出土している。調査の結果、1・2号古墳の被葬者は、石室に使用されている石材から矢田高木森古墳および能登島蝦夷穴古墳とも共通する板石の使用から、七尾湾東部地域の後期古墳と同一勢力圏内にいた人物であることを示し、副葬品に漁労関係品が存在することから漁民集団の純率者と推定される。なお2・3号墳は発掘調査後、現地横に復元され古墳公園として整備されている。

古代 古代(奈良・平安時代)になると海岸沿いに製塩遺跡数が増加する。三室トリA遺跡からは10世紀前半頃の8面に及ぶ製塩炉が確認され、尖底や平底、丸底形の製塩土器と土製支脚などが出土している。三室福浦B遺跡からは8世紀初頭頃の板組井戸跡や溝が確認されている。三室オンド遺跡からは平安時代末期頃の掘立柱建物や鞍部、六角木撞部材の風招が出土し、三室オオタン遺跡や三室トクサ遺跡からは土師器や須恵器、製塩土器、施軸陶器、齋申などの木製品が出土している。

中世 中世(鎌倉・室町時代)では建治元年(西暦1275)五月、京都六条八幡宮の造営用途支配注文に能登在国の御家人役として銭五貫文を負担した「三室判官代入遺跡」の記事が載せられており、この地に「三室氏」という名の武士が存在していたことが確認される。その居住地はどこか判然としないが、丘陵裾の緩斜面に土塁と堀に囲まれた平坦面を持つ館跡が確認され、土師器や珠洲焼などが出土した三室トリC遺跡や15世紀後半から16世紀代の掘立柱建物が確認され、珠洲焼も出土し、鍛冶作業も行われていた三室福浦B遺跡。製塩土器や珠洲焼、檜扇の薄板や下駄、漆器などの木製品、銅銭、刀子などの金属製品が出土した三室オオタン遺跡、三室トクサ遺跡などが存在しており、これらの遺跡が候補地とも考えられる。また、五輪塔や板碑などの石造物も各地で確認されている。

近世 近世(江戸時代)には中世以来製塩が揚浜式塩田で行われるが、近世に入ると塩は藩の専売品として販売するようになり、元禄年間の文書に三室村で塩が焼かれていたとの記録が残ることから、この地でも塩作りが継続されていたことが推定される。

第3章 調査の概要と成果

第1節 調査の概要(第3図)

1. 三室福浦C遺跡・三室福浦1号墳の発掘調査(第1次調査)

遺跡の範囲及び内容確認も含めた第1次調査は、試掘調査時に銅銭が出土した低丘陵先端部の北側頂部を中心にトレンチ調査により行った。表土直下に配石墓や集石墓を確認し、珠洲焼が出土したことから中世墓が複数存在していたと考えられる。下層には横穴式石室の一部と考えられる大型石材を確認し、古墳時代後期から終末期の土師器や須恵器が出土したことから、古墳(1号墳)の存在が確実なものとなった。集落の共同アンテナが接していたことから遺構の完掘はできなかった。

2. 三室福浦C遺跡・三室福浦2号墳の発掘調査(第2次調査)

第2次調査は、試掘時に丘陵南側の頂部から南側斜面上部にかけて確認された石材の分布範囲を中心に行った。平板による現況地形の測量後、土層確認用のアゼを残し表土を人力で掘削した。表土直下に配石墓や集石墓を確認し、珠洲焼や寛永通寶が出土したことから、中・近世の塚状遺構と墓が存在していたことが判明した。斜面では大型の横穴式石室石材を多数確認し、古墳時代後期末から終末期初頭頃の土師器や須恵器が出土した。古墳(2号墳)は斜面の自然崩落や後世の土取り・電柱設置等により墳形は不明で、石室も崩壊しており、元位置を保つ石室石材は確認できなかった。



第3図 調査区位置図

第2節 遺構と遺物(第4～11図、第2・3表)

1. 遺 構(第4～9図)

遺跡は、崎山半島北西側の南から北へと派生する低丘陵の先端部に位置し、標高14～22m代を測る尾根上から南斜面にかけて立地する。後世の土取りや自然崩落により丘陵西側が落差15m以上の崖面となっており、地形も大きく改変を受けている。

1号墳 尾根北側頂部の中世墓下層に位置する。頂部南側寄りに横穴式石室の天井石か側壁の可能性が高い砂岩製の大型石室石材や安山岩製の板石列を確認したが、石材は斜めに傾斜しており、墳丘の崩落により石室が崩壊している可能性もある。出土した須恵器から古墳時代後期末から終末期初頭頃の横穴式石室を持つ古墳が存在すると考えているが、墳形や規模は不明である。

中世塚状遺構 尾根頂部付近の表土直下に複数の配石・集石遺構を確認し、珠洲焼が出土したことから塚状遺構が存在していたと考えているが、表土の流出により墳形や規模は不明である。

1号墓 尾根北側頂部の1号墳上層に、拳大～人頭大の石材を円形に配した径約1.2mの配石遺構を確認した。石材は古墳石室石材と同じ安山岩製の板石や砂岩製の海石などで、小型の物を転用した可能性もある。周辺で銅銭や珠洲焼片が出土したことから中世墓と考えているが、規模は不明である。

2号墓 1号墓から約2m東側に砂岩製の海石と板石を用いた集石遺構を確認した。

2号墳 調査では尾根南側頂部から斜面にトレンチを設定し、石材の分布範囲を確認した。トレンチ横に尾根頂部のアゼ1・2・7、斜面のアゼ3～6を土層観察用として残し、表土・流土を人力により掘削した。正確な規模や墳形は不明であるが、地形の変化から直径約16mと22mの2種類の大きさを想定している。南側斜面の広範囲で確認した石材には、横穴式石室の天井石や側壁、門柱石などの可能性のある大型石材も多数含まれているが、石室は完全に崩壊しており、元位置を保つ石材は確認できなかった。出土遺物から古墳時代後期末から終末期初頭頃の古墳が存在していたと考えている。

中世塚状遺構 2号墳上部の墳頂や斜面を盛土や掘削により円形に整形し、裾に平坦面を持つ径約10mの塚状遺構を確認した。石材の分布状況や土層の観察から、中世の塚状遺構と考えている。

1号墓(集石01) 尾根頂部の平坦面に拳大～人頭大の海石や板石を用いた1辺約1mの方形の配石遺構と下部に深さ約40cmの方形土坑を確認した。土坑からは遺物の出土は無かった。

2号墓(集石02) 南側斜面に長径約1mの集石遺構と下部に楕円形の土坑を確認した。1・2号墓とも遺物の出土は無いが、斜面から珠洲焼が出土していることから、中世墓と考えている。

3号墓(SK01) 頂部北側の直径約1mの土坑から寛永通寶1枚が出土した。近世墓と考えている。

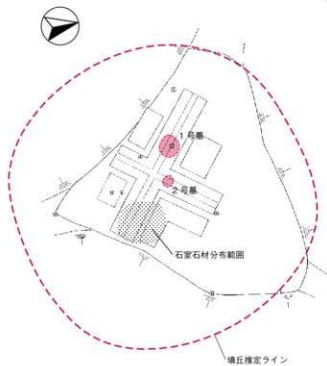
2. 遺 物(第9～11図、第2・3表)

1号墳 1は6世紀末頃と考えられる須恵器杯蓋、2は蔵骨器蓋の可能性のある中世珠洲焼鉢(Ⅱ期)、M1～12の銅銭はM1の唐銭を除き北宋銭である。他に珠洲焼播鉢片などが出土した。

2号墳 3・4は須恵器杯蓋(3は上下逆で壺底部か)、5・6は須恵器 甕口縁(6は上下逆で瓶頸脚か)、7・8は須恵器瓶頸口縁、9は須恵器瓶胴部、10は2方向に棒状の透かしを持つ須恵器高杯脚、11は須恵器壺口縁(Ⅳ期の珠洲焼壺か)、12は土師器高杯脚、13は土師器甕口縁と胴部、14は珠洲焼甕胴部、他に須恵器甕胴部片や内黒土師器片も出土した。須恵器は全体的に器壁も厚く、調整も粗雑であり、焼けひずみも見られ、組成から古墳の副葬品として石室内に置かれたものと考えられる。時期は6世紀末から7世紀初頭頃と考えている。M13は3号墓の土坑から出土した寛永通寶である。

その他 15の珠洲焼播鉢は、機材庫を置かせてもらった遺跡南側の民家敷地内で表採した。

1号墳



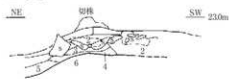
1号墓



1号墓土層断面 (南西～)

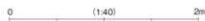
- 1 表土 (粘土の堆積)
- 2 表土 (黄褐色土、しまりなし)
- 3 薄黄褐色土 (地山の成土)
- 4 黄褐色土 (配石層間の上、しまりあり)
- 5 黄褐色土 (配石層方理土か? 黄褐色地山ブロック少量含む)
- 6 黄褐色土 (地山ブロックの堆積、潮方理土 or 地山の成土)

2号墓

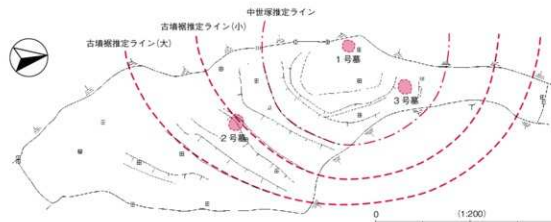
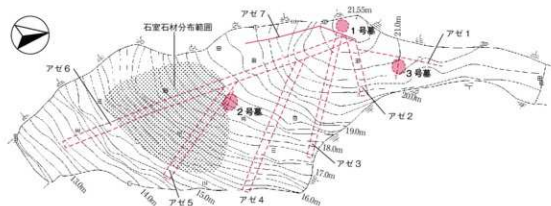


2号墓土層断面 (北西～)

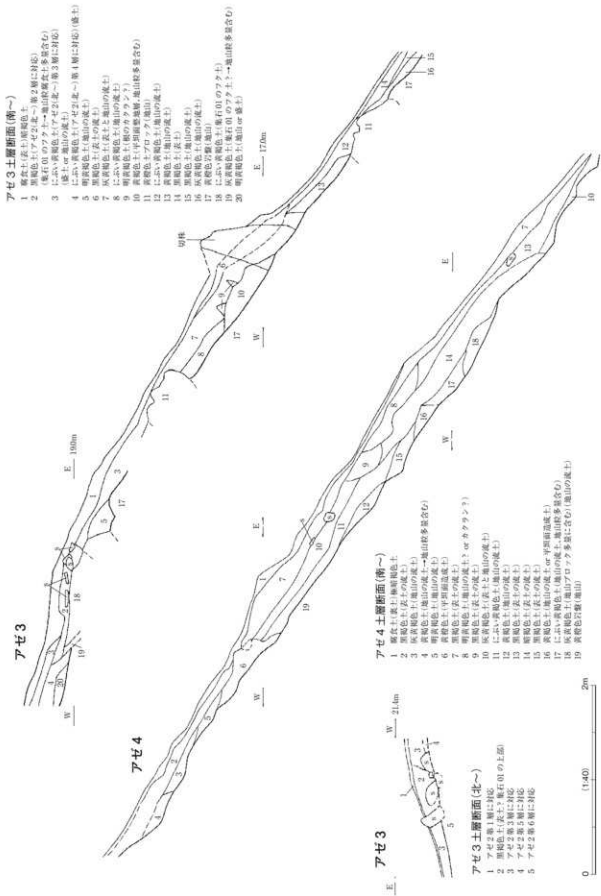
- 1 1号墓1層に対応
- 2 1号墓2層に対応
- 3 1号墓4層に対応
- 4 1号墓5層に対応
- 5 1号墓3層に対応
- 6 1号墓6層に対応



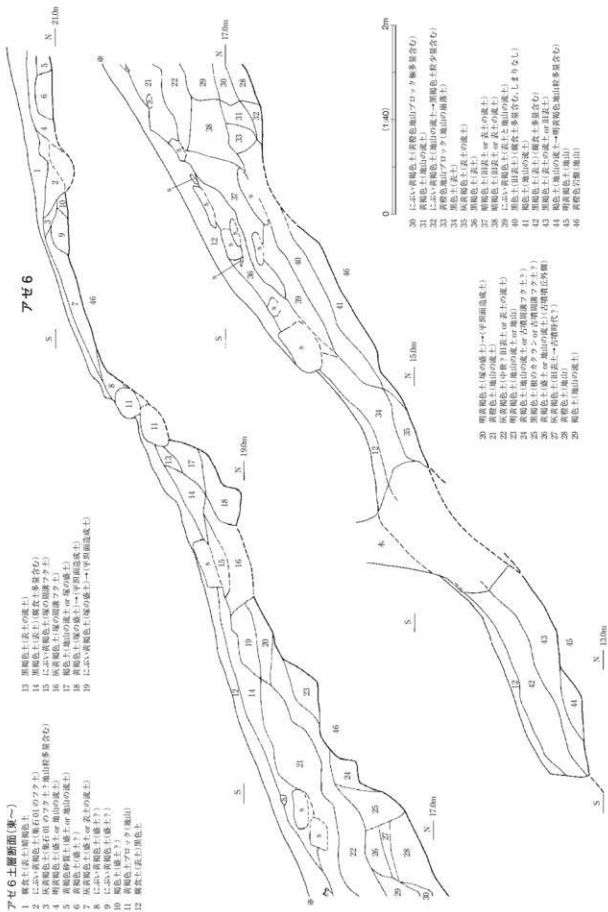
2号墳



第4図 1・2号墳平面図、1号墳中世塚断面図

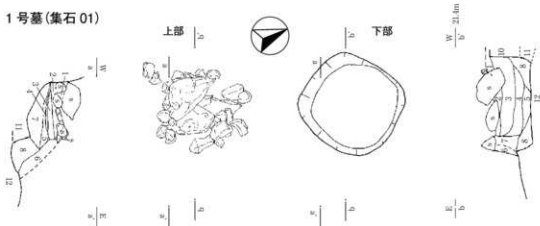


第6図 2号墳丘断面図2



第7図 2号墳丘断面図3

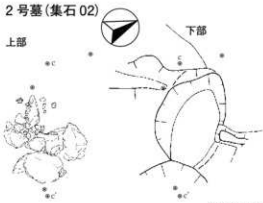
1号墓(集石01)



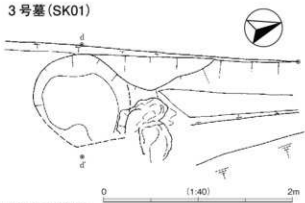
1号墓土層断面(a南~,b北~)

- | | |
|-------------------------|----------------------------------|
| 1 黒色腐食土(表土) | 7 灰黄褐色土(地山ブロッカ多量含む) |
| 2 黒褐色腐食土(集石01の墊地土) | 8 明黄褐色土(地山砂多量含む) |
| 3 褐色土(地山砂少量含む,しまりあり) | 9 褐色土 |
| 4 濃い黄褐色土(しまりあり→地山砂多量含む) | 10 褐色土(古墳赤土 or 地山の流土→地山ブロッカ多量含む) |
| 5 明黄褐色土(地山砂多量含む) | 11 赤褐色土(地山) |
| 6 黒褐色土(根のカタラン) | 12 棕色引盤(地山) |

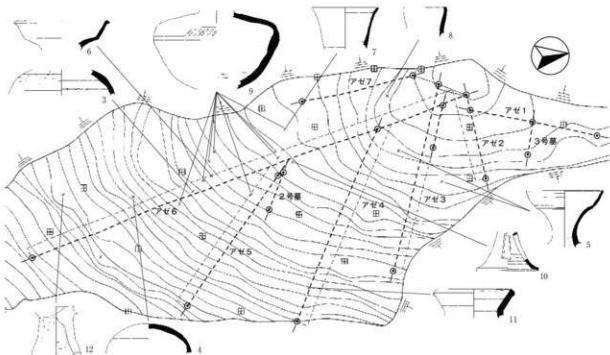
2号墓(集石02)



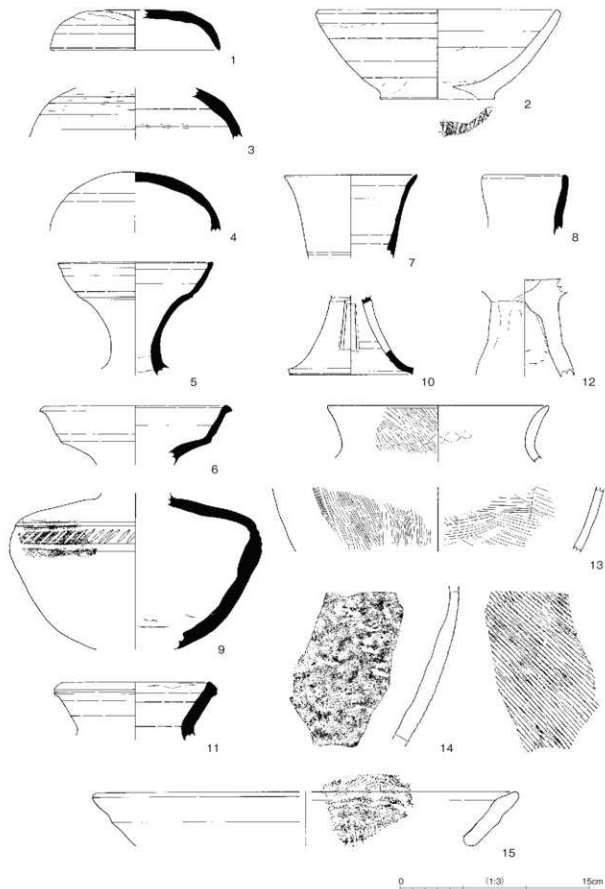
3号墓(SK01)



第8図 2号墳中世墓平・断面図



第9図 2号墳断面位置図・遺物出土位置図



第10図 出土遺物(土器)



第11図 出土遺物(銅銭)

第2表 土器観察表

No	実測番号	出土地点	材質等	器種	口径	口径	器高	器重 (g)		取上	取込	調査(内)	調査(外)	備考
								(内)	(外)					
1	D12	1号墳 No.4	須賀部	埴輪		114	22	92	92	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
2	D1	1号墳 No.1,2,6	須賀部	甕	190	90	71	650	650	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
3	D13	2号墳 No.4	須賀部	埴輪				141	92	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 不明
4	D18	2号墳 No.6	須賀部	埴輪			140	140	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	コソコソナ	赤褐色
5	D4	2号墳 No.3,4	須賀部	埴輪		123	190	92	92	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
6	D5	2号墳 No.13	須賀部	甕	143 (口径134)		147	92	92	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
7	D7	2号墳 No.20	須賀部	甕	160		160	160	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
8	D6	2号墳 No.5	須賀部	甕	62		140	92	92	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
9	D4	2号墳 No.3, 11, 12, 17, 20, 26, 42, 43	須賀部	甕			124	92	140	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
10	D4	2号墳 No.6	須賀部	甕		99	162	92	92	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
11	D4	2号墳 No.20	須賀部	甕	114 (口径130)	68	147	92	92	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
12	D10	2号墳 No.22	須賀部	甕			120	92	140	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
13	D14	2号墳 No.42	須賀部	甕		175	140			須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
14	D12	2号墳 No.20	須賀部	甕		1130	92	92	92	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全
15	D15	2号墳 No.20 コソコソナ	須賀部	甕	約 340		143	92	92	須賀部	須賀部	コソコソナ	コソコソナ	残存度 全

※()は遺存数

第3表 銅銭観察表

No	実測番号	出土地点	銭名	書体	同名	起封年	重量 (mm, g)					備考		
							銭径	銭径	内径	内径	孔径		孔径	厚
M1	3-2	文化財課試掘	開元通寶	真書	唐	621	23.4	23.5	20.3	19.6	6.9	7.1	3.54	6分とくっついて出土
M2	1	文化財課試掘	淳化元寶	行書	北宋	990	21.3	21.7	18.3	18.9	4.8	5.5	1.87	
M3	6	1号墳 銭3	淳化元寶	真書	北宋	990	19.0	18.1	17.1	15.9			1.07	
M4	4	1号墳 銭1	景祐元寶	真書	北宋	1004	22.0	21.9	18.5	18.6	5.6	5.5	2.09	
M5	8	1号墳 銭4-5	皇宋通寶	篆書	北宋	1039	22.5	22.4	18.6	19.4	6.9	7.0	1.98	
M6	10	1号墳 銭8	治平元寶	真書	北宋	1064	21.6	21.6	20.1	20.0	7.0	8.2	2.44	
M7	11	1号墳 銭7	皇祐元寶	真書	北宋	1064	17.0	21.3	14.4	18.6			6.5	(1.74)
M8	7	1号墳 銭4-3	元豊通寶	真書	北宋	1078	22.7	22.5	17.8	18.9	5.9	6.1	1.99	
M9	2-1	文化財課試掘	元豊通寶	行書	北宋	1086	23.9	23.9	19.5	19.4	6.3	6.4	3.20	No1とくっついて出土
M10	5	1号墳 銭2	元祐通寶	行書	北宋	1098	21.0	21.0	18.3	18.3	5.9	5.8	3.18	
M11	9	1号墳 銭6	聖宗元寶	真書	北宋	1098	21.2	21.1	18.7	18.7	6.3	6.2	2.72	
M12	3	文化財課試掘	政和通寶	篆書	北宋	1111	24.3	24.4	20.2	20.2	6.1	6.2	2.33	
M13	12	2号墳(北側) S301上層	寛永通寶	真書	日本	1600	25.4	25.3	20.4	20.8	5.6	5.6	3.49	背打文

※()は遺存数

第4章 まとめ

第1節 三室福浦古墳群1号墳・2号墳について

前述の通り、丘陵斜面は自然崩壊や後世の土取りにより大きく削平されており、古墳築造当時は地形が大幅に改変していることから、1・2号墳とも古墳の墳形や正確な規模は不明である。

1号墳は尾根北側頂部の中世墓下層に位置する。頂部南側寄りに天井石か側壁の可能性が高い砂岩製の大型石室石材や安山岩製の板石列を確認し、表土中から古墳時代後期末から終末期初頭頃の須恵器が出土したことから、横穴式石室を持つ古墳が存在していると考えている。

2号墳は中世墓と重なる尾根南側頂部から斜面上部付近にかけて存在していたと考えられ、地形の変化から直径約16mと22mの2種類の規模を想定している。南側斜面の広範囲で確認した石材には、横穴式石室の天井石や側壁、門柱石などの可能性がある大型の石材も多数含まれているが、石室は完全に崩落しており、元位置を保つ石材は確認できなかった。表土や流土中からは坏蓋や甕、高杯、瓶、甕など古墳時代後期末から終末期初頭頃の須恵器や土師器が出土した。

以上の結果、1・2号墳の築造された時期は、6世紀末から7世紀初頭頃と考えている。

周辺には、南へ直線距離で約1.7km離れた丘陵上の崖際に古墳時代後期の横穴式石室を持つ「三室りきの宮古墳群」があり、南へ約2km離れた市史跡の「三室まどがけ古墳群」には、6世紀後半から7世紀前半にかけての横穴式石室を持つ直径約22mの1号墳と直径約12mの2・3号墳がある。両古墳群の立地や時期は本古墳群と類似する。また、七尾南湾を挟み西へ約5km離れた国史跡の「須曾蝦夷穴古墳」は、7世紀中頃の2基の横穴式石室を持つ径20m弱の方墳であり、周辺には他にも横穴式石室を持つ古墳が複数存在することから、これら古墳との対比も今後必要になってくると思われる。

第2節 三室福浦C遺跡の中世墓・近世墓について

1・2号墳上部の表土直下に複数の配石・集石状遺構を確認した。尾根北側頂部の1号墳上層には、1号墓とした拳大～人頭大の石材を円形に配した径約12mの配石遺構や2号墓とした集石遺構を確認した。石材は古墳石室石材と同じ安山岩製の板石や砂岩製の海石で、小型の石を転用した可能性が高い。周辺から銅銭や蔵骨器蓋の可能性ある珠洲焼鉢が出土し、中世の塚状遺構が存在していたと考えているが、表土流出により墳形や規模は不明である。2号墳上部の尾根南側頂部には斜面を盛土や掘削により円形に整形し、裾に平坦面を持つ径約10mの塚状遺構を確認した。当初は古墳の墳丘とも考えたが、遺物や石材の分布状況から、中・近世の塚状遺構と考えている。尾根頂部には1号墓とした1辺約1mの方形の配石遺構と下部に深さ約40cmの方形土坑を確認した。南側斜面には2号墓とした長径約1mの集石遺構と下部に楕円形の土坑を確認した。土坑から遺物の出土は無かったが、墳丘流土中から珠洲焼片が出土したことから、1・2号墓とも中世墓と考えている。また、頂部北側の3号墓とした直径約1mの土坑から寛永通寶1枚が出土し、近世墓も存在していたことがわかった。

機材庫を置かせてもらった民家裏山に存在する墓地には、中世の五輪塔や近世墓が存在しており、付近で珠洲焼も表採したこと、周辺の丘陵上にも中・近世墓が展開していたと考えている。



1号墳頂石室石材検出状況(南東から)



2号墳南斜面石室石材検出状況(南から)



遺跡遠景(南から)



1号墳1・2号基配石検出状況(西から)



1号墳石室石材検出状況(南から)



遺跡遠景(調査前)(南西から)



1号墳墳頂調査着手前(南から)



1号墳1号墓土層断面図作成作業(北西から)



1号墳石室石材検出作業(南から)



1号墳完掘状況(北から)



1号墳(墳頂北側)完掘状況(北東から)



1号墳完掘状況(南から)



1号墳(墳頂南側)完掘状況(北東から)



1号墳石室石材検出状況(東から)



1号墳遺物出土状況(銅銭)



1号墳遺物出土状況(珠洲焼-2)



1号墳遺物出土状況(須恵器-1)



2号墳南斜面完掘状況(南から)



2号墳南斜面大型石室石材検出状況(南から)



2号墳1号墓配石検出状況(南から)



2号墳墳頂調査着手前(南から)



2号墳3号墓土坑完掘状況(北東から)



2号墳・中世塚状遺構完掘状況(南から)



2号墳墳頂完掘状況(南西から)



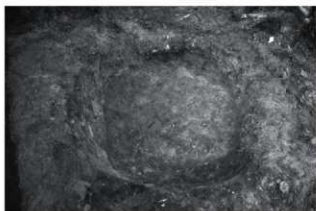
2号墳1号墓配石検出状況(南から)



2号墳1号墓土層断面(北から)



2号墳2号墓集石検出状況(北から)



2号墳1号墓土坑完掘状況(北から)



2号墳南斜面石室石材検出状況(北から)



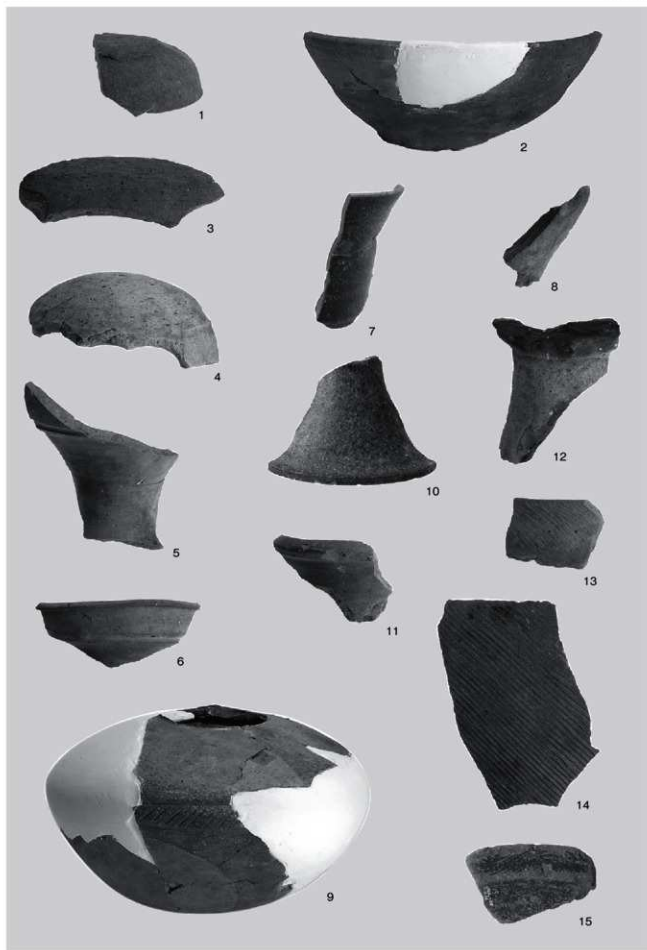
2号墳南斜面石室石材検出状況(南東から)



2号墳遺物出土状況(須恵器-10)



2号墳遺物出土状況(須恵器-6)



三室福浦C遺跡・三室福浦古墳群 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ななおし みむろふくうらCいせき・みむろふくうらこふんぐん							
書名	七尾市 三室福浦C遺跡・三室福浦古墳群							
副書名	福留急傾斜地崩壊対策事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	安中哲徳、米澤義光、中屋克彦、和田龍介							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477 FAX076-229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2011年3月31日							
ユリガな 所収遺跡名	ユリガな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みむろふくうら 三室福浦C 遺跡	いしかわけんななおし 石川県七尾市 三室町福浦	17202	新発見	37度 6分 1秒	137度 1分 19秒	20070919 ～20070928	30㎡	記録保存 調査
みむろふくうら 三室福浦 古墳群	いしかわけんななおし 石川県七尾市 みむろふくうら 三室町福浦	17202	02257	37度 6分 1秒	137度 1分 19秒	20071022 ～20071221	130㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三室福浦C 遺跡	その他の 墓	中世～近世	配石、集石、土 坑墓、塚状遺構	土師器、珠洲焼、 銅銭		中世～近世にかけての墓地		
三室福浦 古墳群	古墳	古墳	石室、集石	土師器、須恵器		古墳時代後期～終末期の古墳		
要 約	<p>遺跡は七尾市街地から北東側に伸びる崎山半島北西端の三室町福浦地内に所在し、七尾湾に向かい北へと派生する低丘陵先端の標高14～22m代を測る尾根上から南斜面にかけて、中・近世墓と古墳が重複して立地している。</p> <p>三室福浦C遺跡では、古墳の上面に分布する中世～近世にかけての配石墓や集石墓、土坑墓、塚状遺構などを確認し、土師器や珠洲焼、銅銭が出土した。</p> <p>三室福浦古墳群内の北側に位置する1号墳では、出土した須恵器から古墳時代後期末～終末期初頭頃の横穴式石室と考えられる石室石材の一部を確認した。南側に位置する2号墳では、墳丘崩落により斜面に散乱したと考えられる横穴式石室石材を確認し、1号墳と同時期の土師器や須恵器が出土した。</p>							

引用・参考文献

本報告書を作成するにあたり以下の報告書・論文等を引用・参考にした。(五十音順、敬称略)

- あ 網谷行洋ほか 1996 『此のモマエダ遺跡・大田谷内遺跡』 石川県七尾市教育委員会
石川県立埋蔵文化財センター 1995 『石川県立埋蔵文化財センター年報』第15号
石川県立埋蔵文化財センター 1996 『石川県立埋蔵文化財センター年報』第16号
- か 船野義夫 1993 『石川県地質誌』 石川県・北陸地質研究所
加能史料編纂委員会 2001 『加能史料』鎌倉Ⅱ 石川県
加藤孝郎 2006 『三室トリC遺跡』『石川県中世城館跡調査報告書Ⅲ(加賀Ⅱ)』 石川県教育委員会
北野博司ほか 1994 『石川県七尾市三室まどがけ古墳群』 石川県立埋蔵文化財センター
北林雅康ほか 2002 『三室遺跡群(三室オオタン・トクサ・新崎遺跡)発掘調査報告書』 石川県七尾市教育委員会
- さ 崎山のれきし編纂委員会 1996 『崎山のれきし』 石川県七尾市
- 白田義彦 2005 『七尾市三室オンド遺跡・三室堂ヶ谷内遺跡』 石川県教育委員会・石川県立埋蔵文化財センター
- た 竹内理三 1981 『角川日本地名大辞典』(石川県) 角川書店
富田和気夫 1992 『須賀蝦夷穴古墳—保存修理事業に係る第1、2次調査の概要—』 石川県能登島町教育委員会
富田和気夫ほか 1997 『史跡須賀蝦夷穴古墳—保存修理事業報告書—』 石川県能登島町教育委員会
富田和気夫ほか 2001 『史跡須賀蝦夷穴古墳Ⅱ—発掘調査報告書—』 石川県能登島町教育委員会
- な 七尾市史編纂専門委員会 1970 『七尾市史』資料編第四巻 石川県七尾市役所
七尾市史編纂専門委員会 1974 『七尾市史』 石川県七尾市役所
七尾市史編纂専門委員会 1999 『国説七尾の歴史と文化』(『新修七尾市史』17) 石川県七尾市役所
七尾市史編さん専門委員会 2002 『新修七尾市史』1考古編 石川県七尾市役所
七尾市文化財保護委員会 1960『能登高木森古墳』(附録三室古墳群の調査) 石川県七尾市教育委員会ほか
七尾のれきし編纂委員会 1983 『七尾のれきし』 石川県七尾市教育委員会
- は 福田豊彦 1993 『田中鏡氏旧蔵典籍古文書『六条八幡造管注文』について』『国立歴史民俗博物館研究報告』第45集
国立歴史民俗博物館
林 大智ほか 2000 『七尾市三室福浦B遺跡・三室まどがけ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- や 安中哲徳 2005 『三室トリ遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第13号 石川県立埋蔵文化財センター
安中哲徳 2008 『三室福浦C遺跡・三室福浦古墳群』『石川県埋蔵文化財情報』第20号 石川県立埋蔵文化財センター
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- わ 若林善三郎ほか 1991 『石川の地名』 平凡社

七尾市 三室福浦C遺跡・三室福浦古墳群

発行日 平成23(2011)年3月31日

発行者 石川県教育委員会
〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842(文化財課)

財団法人 石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社中川印刷